第四章　健やかな成長を願う

第一節　いのちを育む

母子保健

一九六五（昭和四十）年、母子保健法の公布を受け、大口町では翌年、助産部門中心の母子健康センターを設立し、保健指導部門として、妊産婦の健康相談・出産・検診・予防注射などをおこなっていた。

一九七三年、三歳児健診・母親学級に加え、新生児訪問・乳幼児健診（〇～三か月・四～六か月・七～十二か月）・妊産婦相談をおこなった。一九七六年に助産部門の廃止によって保健指導部門のみとなり、母子保健事業は、次の世代を担う健全な子どもを生み育てるために活動の充実を図ってきた。

乳幼児健診に関しては、障害の早期発見・早期治療の目的に加え、子育てを考える場となるよう健診の形態を変化させ、一九七七年から、一歳六か月児健診・歯科健診（はは子教室）、翌年には、四か月・六か月・七～十二か月・一歳六か月・三歳児健診・歯科健診、一九八三年からは、七～十二か月を九か月に変更するなど、試行錯誤を重ねた。また、乳幼児期は母子関係の基盤をつくる大切な時期であるため、育児教室や乳幼児相談など保健指導にも力を入れた。

一九九〇年代に入り、母親の高学歴・少子化・情報過多といった時代背景を受け、母親の悩みやニーズも多様化する中で、一九九六（平成八）年、厚生省（現厚生労働省）より母子保健計画の策定指針が出された。それに基づき翌年、「将来を担う母と子の健康を守り、しあわせを願い、親と子が共にいきいき育つ町の実現を目指す」ため、大口町母子保健計画を策定した。

その後、二〇〇三年に子育てに関するアンケートを実施し、大口町母子保健計画の見直しをおこなった。同年、次世代育成支援対策推進法が施行されたことを受け、二〇〇五年に大口町次世代育成支援行動計画を策定し、子どもの健康に関する連絡会を開催した。

二〇〇四年、愛知県特定不妊治療助成事業が開始され、二〇〇七年に一般不妊治療の助成を開始した。二〇〇九年には、妊婦健康診査の公費負担回数を七回から一四回に増やし、二〇一四年から、産婦健診の費用助成を開始した。

妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援のため、母子保健サービスと子育て支援サービスを一体とし、きめ細かな相談支援がおこなえるよう、二〇一七年の母子保健法改正により子育て支援センターが新たに規定された。同年十月、大口町子育て支援センターを北保育園内に開設した。

二〇二〇（令和二）年、大口町子育て世代包括支援センター（母子保健型）を保健センター内に開設し、産婦健診を一回から二回に増やし、産後ケア事業を開始した。このセンターでは、子育て支援センターと保健センターの連携型となっている。

子ども医療助成制度

この制度は、受給対象者が、安心して必要な医療を受けられる福祉医療制度の一つである。町で一九七三年四月、県の福祉医療制度の一つとして乳児医療制度を創設し開始した。一定の要件を満たすと、自己負担なく医療が受けられ、その費用を県と市町村が二分の一ずつ負担している。

町における制度の変遷（2―4―1）のうち、県助成対象は二〇二三年現在、通院が未就学児、入院は中学生までとなっている。制度の創設から五〇年近くを経て、今では子育て支援制度の一つとして位置づけられている。

	通　院	入　院	助成内容
1973年4月	1歳の誕生月末まで		自己負担なし
1992年4月	2歳の誕生月末まで		自己負担なし
1994年4月	3歳の誕生月末まで		自己負担なし
1995年4月	3歳の誕生月末まで	4歳の誕生月末まで	自己負担なし
1996年4月	4歳の誕生月末まで		自己負担なし
2002年4月	4歳の誕生月末まで	7歳の誕生月末まで	自己負担なし
2006年4月	4歳の誕生月末まで		自己負担なし
	8歳の誕生月末まで		自己負担額の3分の2を助成
2008年4月	15歳に達した日以後、最初の3月31日まで		自己負担なし
2021年4月	15歳に達した日以後、最初の3月31日まで	18歳に達した日以後、最初の3月31日まで	自己負担なし
2023年4月	18歳に達した日以後、最初の3月31日まで		自己負担なし

2-4-1　町条例による子ども医療助成制度の変遷

第二節　幼児の成長

保育制度

一九二〇年代までに全国的な普及をみせた保育所・幼稚園は、一九四七（昭和二十二）年、学校教育法の成立により幼稚園が、同年成立の児童福祉法で保育園がそれぞれ制度化された。

幼稚園の目的は学校教育法において、「幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と規定し、小学校入学以前における正規の教育の第一段階としている。

一方、保育園は「すべての児童は、等しく生活を保障され、愛護されなければならない」と、児童福祉を保障する場と定められた。しかし、一九五一年の児童福祉法改正において、保育に欠ける乳幼児を保育する場と規定されたことで、託児所的な役割が主となった。さらに一九六一年、保育に欠ける主な要件を「母親が子どもの養育にかかれないこと」と厚生省（現厚生労働省）が示したことで、幼児期の保育と教育の不分離を認めながらも、保育園と幼稚園の機能の相違が強調された。

その後、高度経済成長を経て女性の社会進出が増えたり、一九七三年の第二次ベビーブームをピークに少子化傾向となったりしたことに加え、核家族化が進んだことにより保育のあり様が再検討された。

一九八九（平成元）年、国連において、子どもの権利条約が採択されたが、同年、幼稚園教育要領の改訂で、子どもを主体として、子ども一人一人をどう育てていくかが考えられるようになった。

そして、子どもを主体とする保育観の変化や子育て支援の側面から、二〇一五年から始まった子ども子育て支援制度では、保育園・幼稚園に加え、地域型保育として、家庭的保育・小規模保育・事業所内保育・認定こども園などを保育の場とした。保育園はかつて、保育に欠ける児童を対象としてきたが、子育てをおこなう専業主婦家庭に対象を広げたことで、保育園や幼稚園に求められる役割は、家庭保育の補完から地域子育ての支援の場へと変化している。

二〇二一（令和三）年度の学校基本調査によれば、幼稚園の公立比率は、全国平均が三三・五％、愛知県が一三・九％である。

	保育園（人）							幼稚園《（　）内は町内在住》（人）				合計（人）
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	小計	3歳児	4歳児	5歳児	小計	
1970年度				67	193	227	487					487
1980年度			8	145	195	246	594	33	51	42	126	720
1990年度		9	19	104	134	167	433	70	70	73	213	646
2000年度	13	17	36	142	158	166	532	88	92	83	263	795
2005年度	7	23	41	170	165	171	577	118	93	112	323	900
2010年度	16	47	55	159	153	161	591	153	109	89	351	942
2015年度	22	45	42	108	112	103	432	116 (64)	137 (82)	115 (58)	368 (204)	800 (636)
2020年度	33	79	78	112	120	121	543	126 (80)	142 (90)	140 (101)	408 (271)	951 (814)

2-4-2　町内の園児数（保育所・幼稚園）の推移

・1970年・2000年・2005年の保育園児の係数は、所管課の調査による。
・1980年の保育園児の係数は、『大口町史』による。
・2010～2020年の保育園児の係数は、主要施策の成果報告書による。
・2015年・2020年の保育園児の係数は、中保育園の園児数が含まれていない。
・幼稚園児の係数は、学校基本調査による。
・1980～2000年の幼稚園児の係数は、大口幼稚園のみ。
・2000年・2005年の幼稚園児の係数は、『愛知県統計年鑑』による。
・2005～2020年の幼稚園児の係数、大口幼稚園とラ・モーナ幼稚園の園児数を合算したもの。
・幼稚園の係数のうち2015年・2020年の（　）内の係数は、町内在住の園児数。2010年以前の町内在住園児数は不明。

保育園施設の整備

二〇二三年現在、町内に公立保育園が三か所、私立保育園が一か所、私立幼稚園が二か所あり、公立幼稚園はない。

一九四七年、児童福祉法が制定され、村内でも保育所設置の声が高まり、一九五〇年十二月、大口北小学校と大口南小学校内にそれぞれ北保育所と南保育所を併設した。開園時は小学校普通教室を借り、就学前の一年保育であったが、一九五二年から三年保育が始まった。一九五三年に両保育所とも小学校の敷地内に独立して保育所建物を建設し、建物内は遊戯室一、普通教室三、給食室があり、保育士（当時は「保母」と呼称）二人、調理員兼用務員一人、園児約八〇人であった。

その後、人口が増加し、幼児教育への認識や主婦労働の増加など生活環境の変化もあり、保育所増設の声が高まったため、一九六六年以降、追加設置を順次実施した。

保育環境への要望も多様化する中、一九七八年に私立幼稚園が設置され、また、出生数の減少から二〇〇〇年、東保育園を休園し、その施設を利用して新たな私立幼稚園を開園するなど、保育施設も変化してきた。

二〇一四年、保育メニューの拡大により、保護者にとっ

て保育サービスの選択肢拡大を促し、公立保育園と民間保育園が互いに刺激・競争・強調することで、町全体の保育の質の向上を図ることを目的に、中保育園の民営化を実施した（2―4―2～10）。

	事　柄
1950	南保育所を南小学校に、北保育所を北小学校に併設開園
1953	南保育所・北保育所ともに、校庭に園舎新築
1961	北保育所、城屋敷二丁目地内（六部橋南）に移転
1966	中保育所設置（現西保育園所在地）
1968	南保育所、奈良子三丁目（現南小西側駐車場）移転
1970	東保育所設置（現ラ・モーナ幼稚園所在地）
1971	北保育所、城屋敷一丁目（現中保育園所在地）移転
1976	五か所目の保育所設置により一部園名変更 中保育所→西保育園、北保育所→中保育園 北保育園（中小口二丁目に新設）
1978	学校法人岩倉学園「大口幼稚園」開園
1983	南保育園、御供所三丁目に移転
2000	東保育園休園
2004	学校法人岩倉学園「ラ・モーナ幼稚園」開園
2014	中保育園民営化「宝光福祉会・大口中保育園」開園

2-4-3　保育園施設の変遷

2-4-6　中保育園（現西保育園）（1992年改築時）

2-4-4　南保育園（1983年移転改築前）

2-4-7　西保育園（2019年撮影）

2-4-5　南保育園（2022年撮影）

2-4-8　中保育園（1992年改築前）

2-4-9　中保育園（1992年改築後）

2-4-10　東保育園（1987年）

北保育園　一九七六年に開園した北保育園（2―4―11）は、二〇一三年には園舎の老朽化と周辺地域の人口増、さらには三歳未満児保育需要の増加に対応するための教室確保が急務となっていた。

また、親子通園施設の再整備、子育て支援策の充実のため、その拠点整備の必要性も増していたことから、それらを網羅する園舎の建替えを実施することとなった。

これまで学校施設や児童センターなど、子ども達にとってより良い環境を提供するため、可能な限り木材を利用してきたが、園運営を継続しながら実施する事業であったことから、当初は鉄筋鉄骨二階建ての構造で検討が進んだ。

そのような中、町内に本社を置くタイム技研株式会社から、岐阜県関市内に所有する山林の立木を無償提供できるとの申し出があり、岐阜県・関市・中濃森林組合から、伐採に関する林道新設や伐採費の補助提案も受けた。さらに、中庭に仮園舎を設けることで木造平屋建て施設の建設が可能とのシミュレーションができ、県内で集成材製造・加工を手掛けている企業などの力添えも得られるとのことから、木造改築が決定した。

立木の切り出しにあたっては、木造園舎建設を願う多く

の人々が参加した（2―4―12）。人力で切り出した原木は、別管理して遊戯室の縦柱として利用している。さらに園内には新たに井戸を掘削して、井戸水を利用した空調システムも導入している。

なお、保育園と一線を画した外観について、北保育園が立地する中小口地区には、一四五九（長禄三）年に織田広近が築いた小口城と、小口城から犬山の木之下城へと通じていたと伝えられている通称「織田街道」などの文化遺産があることから、武家屋敷風とした（2―4―13）。

2-4-11　北保育園（1976年）

2-4-12　立木の切り出しを手伝う園児（2015年撮影）

2-4-13　北保育園（2017年撮影）

西保育園　一九六六年、中保育所として余野地内に開園し、一九七六年に名称が変更された西保育園は、一九八二年に改築工事をおこなった。

二〇一三年に北保育園改築事業が終了した頃、西保育園でも三歳未満児保育需要の増加によって教室不足が懸念された。

保育所は通常、通園区域を特定していないため、利用者の居宅から遠距離となる保育園で子どもを受け入れる調整もしてきたが、それも困難な状況であった。

二〇一八年、西保育園の改築や増築、仮設園舎設置などを検討した結果、園児数は微増若しくは維持傾向にあるものの、その先については減少に転じると想定されることから、将来的にも利用できる教室と、手狭になり老朽化していた調理室を整備し、従来の園舎の内側に回廊を設ける計画を立てた。

この設計の場合、園児数が減少に転じた折には旧園舎を段階的に取り壊し、跡地に木造教室を整備することで、将来は木造平屋建ての園舎とすることを想定している。

外観は園児に思いの差を生じぬよう北保育園と同様にし、二〇二〇年竣工（しゅんこう）した（2―4―14）。

全景

回廊外観

回廊内部

2-4-14　西保育園の増築（2022年撮影）

保育園の運営

三歳児保育と三歳未満児保育　一九五二年、南保育所・北保育所は三年保育を開始した。保護者は、満三歳児から保育所に入園させることができるようになった。

その後、核家族化、働く女性の増加、ライフスタイルの変化など様々な要因によって、三歳未満児の保育が一九七八年から始まった。当初は中保育園のみで実施し検証をおこなった後、他園へ順次拡充した。

保育時間　開所当時は、平日の午前八時三十分から午後四時もしくは午前八時から午後三時三十分までであった。

延長保育の制度は、一九七九年から南・北保育園で午後五時までの延長保育を始め、その後、中保育園のみ午後五時三十分までとなり、さらに南保育園は午後六時三十分まで、北・中・西保育園は午後七時までと徐々に拡大していった。

土曜保育は、二〇〇六年から中保育園に集約し、民営化後も引き続き実施している。その後、土曜保育の利用者が多くなったことから、二〇一七年より公立園の土曜保育を、西保育園でもおこなっている。日曜日・祝日の休日保育についてもニーズが高まったため、二〇一四年から西保育園で実施している。

保育方針（目標）の変遷　「心身ともにたくましく、よく遊ぶこども」像を掲げ、時代とともに改定を繰り返してきた保育所保育指針に基づき、自然豊かな環境の中、戸外遊びや散歩を楽しみ、運動会や生活発表会など季節の行事をおこなった。

一九八七年には、草花あそびを題材とした保育を展開し、「自然とのふれあい・草花あそびの指導」と題し、丹羽郡町立保育園で共同研究をおこなった。その結果、故珠川善子（初代名古屋市保母会長）から愛知県社会福祉協議会保育士会への寄附金をもとに、県保育士会での研究発表に対して研究奨励金を贈呈する「珠川賞」を受賞した。同時に書籍『自然はともだち～草花あそび～』を発行し、日常保育で活用してきた。

やがて、核家族化や少子化により地域での子育て支援の役割も担うようになり、異年齢児保育や、園庭開放などをおこなった。また、親子デイキャンプや田植え・稲刈り体験・鳴子や和太鼓を取り入れ、やろ舞い大祭や伝統芸能発

表会への参加など、日常保育以外の様々な体験の機会を持った。

そして、共働き家庭の増加や生活様式の多様化にともない、未満児保育の充実が叫ばれるようになると、ふれあい遊び、ごっこ遊びなどで、ひとりひとりの情緒の安定を図り、成長発達を促す丁寧な保育をおこなっている。

三歳以上児においても、専門講師による英語や体操教室を取り入れながら、自主性を育てる保育を展開している。

二〇一〇年以降、木育・食育・郷土愛・ＳＤＧｓ（持続可能な目標）を意識した活動を取り入れつつ、手づくりのラッキーパズルやけん玉など、二〇二三年現在も受け継がれている活動もある。

このように、時代の変化に合わせて方針を変えつつ、温故知新の精神で、次世代を担う宝である子ども達が、豊かな心を持ち、夢と希望を抱きながらそれぞれの個性を伸ばし、健康で育つよう保育を進めている。

保育園のけん玉遊び

保育園のけん玉遊びは、一九七六年に園長（当時は全ての保育園で一人の園長でした）に就任された奥村久男先生が、子どもの集中力・持久力・頭を使う力を養う遊びとして、昔の子どもの手作りおもちゃである、けん玉・竹馬・たたきコマ・木製パズルなどを各保育園の遊びとして取り入れました。

けん玉が具体的に何年から各保育園で取り入れられたのか、はっきりとわかりませんが、当時園児だった方々のお話を伺うと、一九七七年頃だと考えられます。その後途絶えることなく活動は続けられ、園児が大人になり、保護者として保育園で子どもがけん玉遊びをする姿を見守ったり、保護者自身が昔覚えたけん玉を子どもに披露したりする家庭も増えてきました。

町民体育祭でおこなわれる園児と保護者によるプログラムでは、親子でけん玉の披露があります。その際、子どもの頃けん玉遊びを経験した保護者は、難なくけん玉を操るため、町外から引っ越してきた保護者は、驚くこともあるそうです。

中保育園の民営化　地方分権が進む中、保育園のあり様や保育園が抱える課題解決、さらには民営化について、職員間で学び深めるため、二〇一〇年から継続的に勉強会を実施した。その結果、民営化による保育サービスの拡充と保護者の選択肢の拡大、そして公立と民間が互いの持ち味を生かし切磋琢磨（せっさたくま）することで、町全体の保育の質の向上などを目指し、中保育園を民営化対象園とした。

移管先法人を決定するにあたり、第三者機関として大口町立中保育園民営化移管先法人選定委員会を設置した。

この委員会は、二〇一二年九月から開催し、申し込みのあった四法人の中から、社会福祉法人宝光福祉会に決定した。

決定後、移行期間を経て二〇一四年四月、新たなスタートを切った大口中保育園は、従来の保育サービスを引き継ぎながらも、民間の特色を生かした保育の提供を開始した（2―4―15）。

2-4-15　民営化された大口中保育園

幼稚園

大口幼稚園　ラ・モーナ幼稚園　学校法人岩倉学園は、一九七八年に大口幼稚園を、二〇〇四年にラ・モーナ幼稚園を町内で開設した。同法人は創立者が「三つ子の魂百まで」のことわざに鑑（かんが）み、幼児教育の重要性を痛感し、一九六七年に岩倉幼稚園を設立している。

学園の教育基本理念は「健康で、明るく、よく考え、たくましく、感謝のできる子どもに育てる」、目指す子ども像は「友だちと仲よく遊べるこども・自分でできることは自分でするこども・明るく、いきいきとしているこども・よく見、よく考えてやりとおすこども」とし、幼児教育の充実に努めている。

大口幼稚園は、大口町高橋二丁目地内に所在する（2―4―16）。開園当初、二学級・四六人だった園児数は、

2-4-16　大口幼稚園（2023年撮影）

二〇二二年には一〇学級・二四八人となった。

特色ある教育として、講師による英語教室・音楽教室・絵画教室・体育教室・習字教室（年中・年長）を実施している。

また、特別教室のほか、日常保育や行事、町内行事への参加など様々な体験活動を通して、一つ一つの成功体験を積み重ね、子どもの頑張りを認める、ほめる、自信に繋げ、自己肯定感を高めるきめ細かな保育を展開している。

ラ・モーナ幼稚園は、二〇〇〇年に休園した東保育園（大口町河北三丁目地内）の施設を利用して、町内二園目の幼稚園として開園した（2―4―17）。開園当初、二学級・三七人だった園児数は、二〇二二年には、六学級・一一六人となった。

2-4-17　ラ・モーナ幼稚園（2023年撮影）

特色ある教育として、ネイティブスピーカーによる英語教室（週三回）・パソコン教室（年中・年長）・造形教室・音楽教室・体育教室を実施し、町内の恵まれた自然豊かな環境を生かし、動植物の生態や四季の自然の変化を感じ、豊かな情操を育む保育を展開している。

両園ともに、四大行事（七夕遊戯会・運動会・クリスマス遊戯会・作品展）を節目とし、それらに向けた活動をはじめ遠足などの屋外行事や、年長は幼稚園でのお泊まり保育、寿の会（老人施設での交流会）、文化的鑑賞会など、多様な活動をおこなっている。

幼稚園における子育て支援　二〇〇七年の学校教育法改正により、新しく幼稚園の役割として子育て支援が位置づけられた。そのため、幼児の家庭や地域での生活を含めた生活全体を豊かにすることを目指し、未就園児対象のすくすく教室（年間一三回程、教育相談）を実施し、学校の教育課程に関係して教育時間の前後や長期休業中に、希望者を対象とした預かり保育をおこなっている。二〇〇八年と二〇一八年には、幼稚園教育要領が改訂され、子育て支援の一層の充実が図られている。

親子通園

一九九三年、就学前の幼児で心身に発達の遅れや心配ごとがある場合、日常生活の自立に向けて保護者と一緒に通園し、親子や他児とのふれあいを通して幼児の心身の発達を助長させるため、親子通園を東保育園に設置した。

親子通園は、空き教室を利用していたことから、その後、二〇〇六年に西保育園、二〇一〇年には南保育園へと移動した。二〇一六年、北保育園整備に合わせて親子通園棟を整備して対応している（2—4—18）。

2-4-18　親子通園棟の外観と内部

放課後児童クラブと児童センターの設置

一九九一年五月、留守家庭児童に対し、放課後に適切な遊びや生活の場を与え、健全な育成を図ることを目的に放課後児童クラブが始まった。対象学年は小学一年生から三年生まで、開設時間は放課後から午後六時三十分であった。

開始当時は、西児童クラブのみ七人で、西保育園の教室を活用した。一九九三年には二五人となり、大口西小学校で未使用だったクラブハウスに移転した。同年、大口北小学校クラブハウスを使い北児童クラブが八人で始まった。一九九六年には、大口南小学校クラブハウスを活用して児童一人で始まった（2—4—19）。

一九九九年に西児童センター（2—4—20）、二〇〇一年に南児童センター（2—4—21）、二〇〇四年に北児童センター（2—4—22）をそれぞれ開設すると、各児童クラブは

名　称	場　所	定員
大口南児童クラブ	南児童センター内	75人
大口北児童クラブ	大口北小学校敷地内	110人
大口西児童クラブ	大口西小学校クラブハウス	45人
西っ子ファミリー	西児童センター内	40人

2-4-19　児童クラブと定員数

活動場所を児童センターに移した。

二〇一五年度からは、対象学年を小学六年生まで拡大した。

開設時間は、夏・冬・春休み期間の平日が、午前七時三十分から午後六時三十分まで、土曜日は西児童センターで午前七時三十分から午後六時までとなっている。

児童センターは、児童クラブの活動の場としてだけでなく、地域において児童に健全な遊びを提供することにより、その健康を増進し、情操を豊かにすることを目的としている。

また、児童の健全育成だけでなく、子育て支援も積極的におこなっており、児童センターは十八歳未満の児童・生徒や就学前の幼児と保護者に広く開放し、子育て支援や子どもの仲間づくりの場となっている。

2-4-20　西児童センター（2022年撮影）

2-4-21　南児童センター（2022年撮影）

2-4-22　北児童センター（2022年撮影）

子育て支援センター

二〇一七年十月、北保育園内に子育て家庭などに対して情報提供や相談指導をおこない、子育てサークルといった育成支援も実施することにより、地域全体で子育てを支援する基盤形成を図る機能を持つ、子育て支援センターを設置した（2―4―23）。

妊産婦や就園前の子どもを持つ親子が、ゆったりと過ごせる場所として、また、子育て中の親子の出会いの場として利用されている。

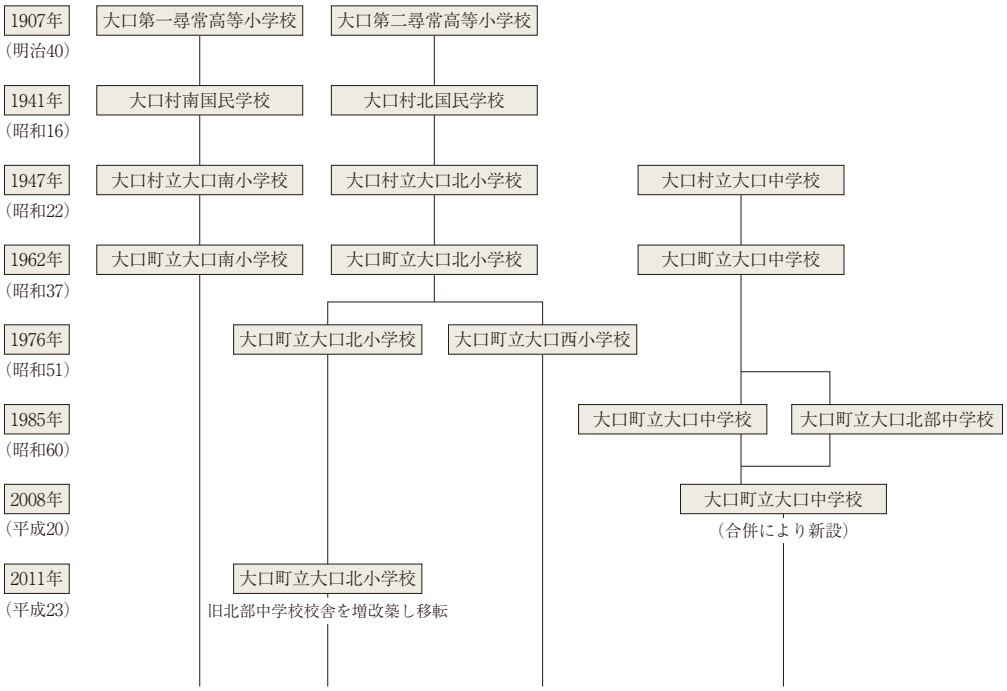
2-4-23　子育て支援センター（2023年撮影）

第三節　子どもの成長

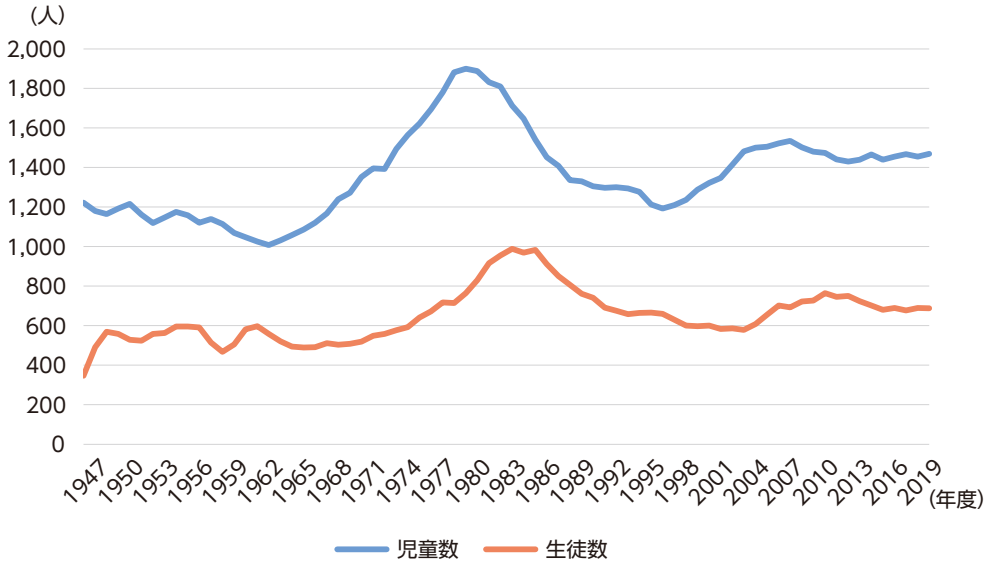
学校のうつりかわり

一九四七（昭和二十二）年四月、学校教育法が施行されると、初等科六年・高等科二年の国民学校から小学校六年・中学校三年の義務教育が始まった。名古屋市内の空襲による校舎不足に比べ、大口村は校舎の空襲被害がほとんどなかった。しかし、中学校は校舎建設が間に合わず、当初は大口南小学校と大口北小学校に分かれての授業であった。校舎が竣工（しゅんこう）し、大口中学校の生徒が一緒に授業を受けられるようになったのは、同年十月からだった。

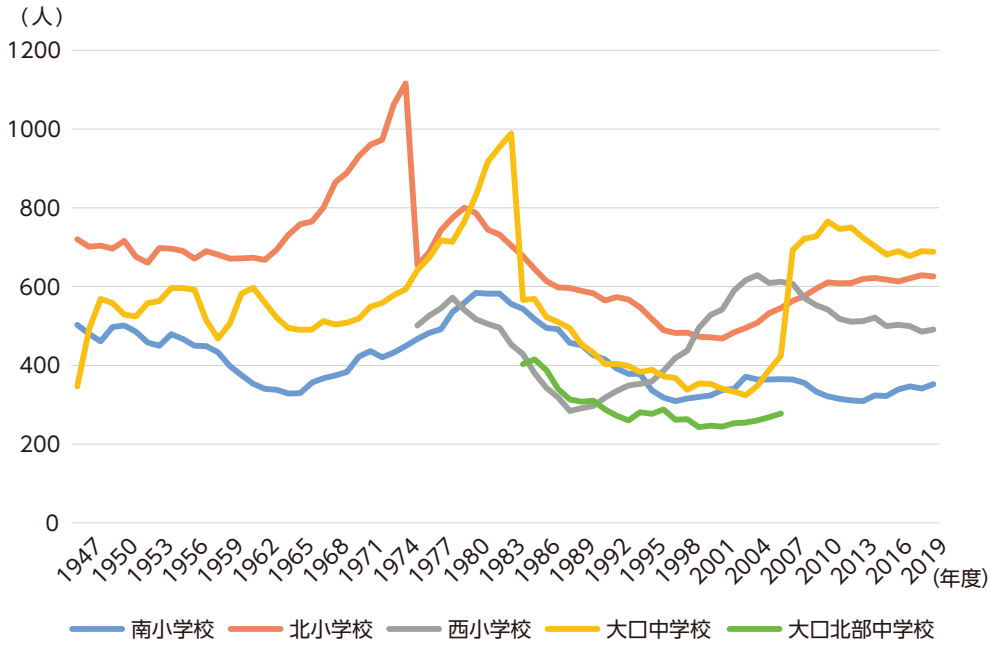
その後、児童数の増加により、一九七六年に北小学校から児童が分かれて大口西小学校が誕生した。中学校も生徒数の増加により、一九八五年に大口北部中学校が誕生した。しかし、しばらくして徐々に生徒数が減少し、学校運営にも支障が出てきたため、二〇〇八（平成二十）年に再び大口中学校と統合した（2—4—24・25・26）。



2-4-24　小中学校の沿革図



2-4-25　児童・生徒の推移



2-4-26　学校ごとの児童・生徒の推移
※2008年からは、統合した新生 大口中学校の生徒数。

大口西小学校の設置　町制施行後、経済発展と共に町の人口も順調に増え、一九六九年、井上町長が新小学校設置を表明した。同年、町議会に学校用地取得特別委員会が設置された。そして、一九七二年、余野字田代（現余野六丁目）地内に一万六六一六㎡を用地とした。

一九七五年、敷地造成・校舎建設に着手し、一九七六年四月、大口北小学校の通学区域を分離して児童五〇一人による大口西小学校が開校した（2―4―27）。同年、プールが竣工し（2―4―28）、その翌年には屋内運動場も竣工した。

2-4-27　大口西小学校開校式

2-4-28　プール開き

生徒増減による中学校の分校と統合　一九八〇年代に入ると、大口中学校には一〇〇〇人近い生徒が在籍し、普通教室が足らず、運動場にプレハブ校舎を設けて対応した。一九八二年、文部省（現文部科学省）から児童生徒急増市町村として指定され、学校用地の確保や校舎建設、備品購入など新しい中学校を設置することが急務となった。そして、一九八五年四月、大口北部中学校は、大口中学校から分離開校した。この時の生徒数は大口中学校が五六六人、北部中学校が四〇三人、計九六九人であった（2―4―29）。

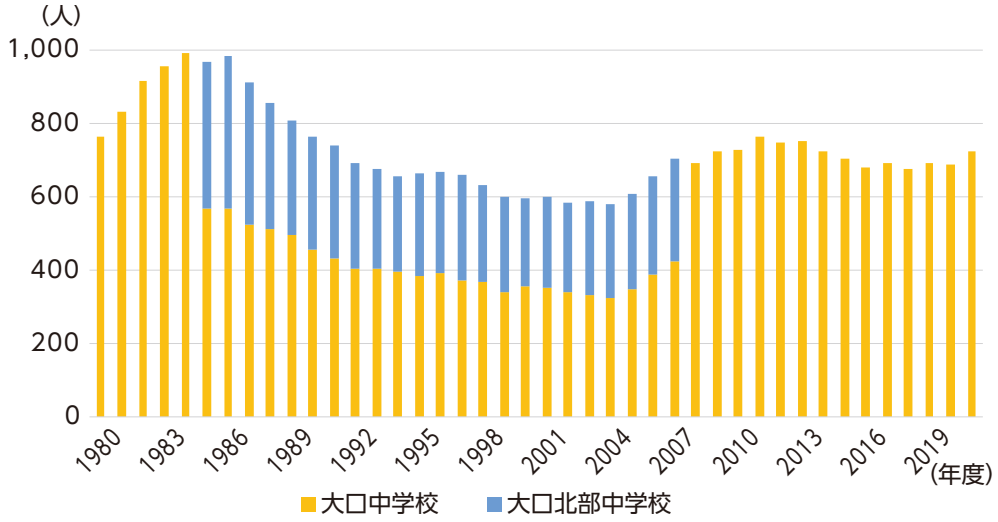
しかし、少子化とともに二〇〇〇年代に入ると生徒が大幅に減少し、廃部になる部活動が出るなど様々な支障をきたすようになった（2―4―30・31）。このため、二〇〇四年から統合に向けての協議が始まり、二〇〇八年に統合した。

	大口中（人）	大口北部中（人）	計（人）
1982年度	917	―	917
1983年度	960	―	960
1984年度	989	―	989
1985年度	566	403	969

2-4-29　生徒数の推移（1982-85）

	大口中（人）	大口北部中（人）	計（人）
2002年度	340	244	584
2003年度	333	253	586
2004年度	324	255	579
2005年度	348	260	608
2006年度	388	268	656
2007年度	424	278	702
2008年度	693	―	693

2-4-30　生徒数の推移（2002-08）

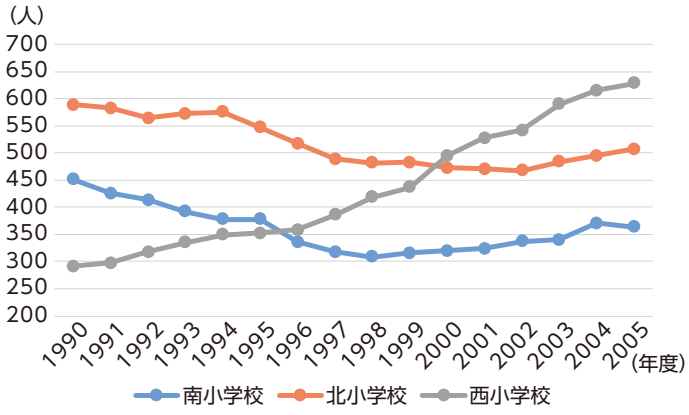


2-4-31　町内の中学校に通う生徒数の推移（1980-2021年）
※2008年からは統合した大口中学校。
（「分離記念38年誌」、「第５次大口町総合計画」、「大口町の統計」）

大口西小学校再編整備計画　各中学校の生徒数が減少していた一九九七年、西小学校区では余野地区の区画整理事業が終了し、一戸建てやアパート建設が進んだ。そのため、人口が急増し、児童増による西小学校の普通教室不足が懸念されるようになった（2―4―32）。

教育委員会では、西小学校から北小学校に児童を振り分けるべく、学区変更案を伝え地元説明会を開催したが、住民から強い反対を受けた。

教室不足は深刻な状況にあり、校区の見直しに理解を得るには時間がかかるとの判断から、校舎の増築（普通教室六教室）案を検討し、二〇〇一年度中に校舎を増築した。



2-4-32　町内小学校の児童数の変遷（1990-2005）

学校の整備再編計画の作成　各中学校や西小学校の課題をふまえ、二〇〇三年に教育委員会が作成した整備再編計画では、二つの中学校を統合して、北小学校は旧北部中学校に移転開校するとした。また、南小学校・西小学校は耐震改修をおこなうとした。

当時は全国的に、公共施設におけるアスベスト撤去、建物の耐震化が課題とされ、とりわけ学校校舎の耐震化については、文部科学省が市町村ごとの進捗状況を公表するまでになっていた。

町では主に学校の体育館の屋根仕上材にアスベストが多く使われていたため、その撤去を先行して始めた。校舎の耐震化については、耐震化診断テスト結果を待って計画を策定した。

二〇〇四年、各小中学校の教員一名と学校教育課を事務局とするプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトでは検討や視察を重ね、結論として中学校の教科センター方式、小学校のオープンスクールを「夢のある学校プラン」として当時町長であった酒井に報告した。町長からは「町民と一緒になって新しい中学校をつくってほしい」と指示が出された。

明日の学校づくり検討委員会と合同ワークショップ　二〇〇四年八月から二〇〇五年一月までの間、町民の代表で構成された明日の学校づくり検討委員会を計五回開催した。その結果、統合中学校を二〇〇八年に設置すること、教科センター方式については議論を繰り返した上で採用すると意見をまとめた。

その後、二〇〇五年一月から二月に計四回のワークショップを開催し、校舎の配置や教科教室とクラスルームのあり方などについて協議した。

統合中学校の開設に向けて　二〇〇六年、統合中学校開設準備委員会を設置して、学校教育目標について同年七月から十二月末までに計六回の協議をおこなった。

また、教育課程に関する部会を設置して、二〇〇五年十月から二〇〇七年十二月まで、両中学校の校長・教頭・教務・指導主事が一六回の部会を開催した。教科センター方式導入に向けた取り組み、教務に関わる諸事項のすり合わせ、教科センター方式についての教職員の理解・教室の配置・日課・時間割など、授業をおこなう上で支障がないよう綿密に協議された。

小学校のあゆみ

大口南小学校

大口南小学校は、大口町南部に位置している。大口村誕生の翌一九〇七（明治四〇）年、大口第一尋常高等小学校として開校し、戦時下の一九四一年に大口村南国民学校と改称後、一九四七年に大口南小学校となった（2―4―33）。

校区には、『裁断橋物語』（名古屋市熱田区・精進川に架けられた東海道の橋を舞台とする、堀尾金助とその母の物語）に登場する堀尾金助の出生地跡を有し、その縁で名古屋市立白鳥小学校と一九六六年に姉妹校となり以後五〇年以上、交流が続いている（第三編第四章第三節）。

一九八〇年代後半から図書活動の推進に取り組み、一九九二年には東海三県学校図書館総合優秀賞を、二〇〇八年には文部科学大臣より、読書活動優秀実践表彰を受けた。

二〇一二年、学校施設の全面建て替えでは、地球・教育環境や図書館教育の充実を念頭に設計し施工した。二〇一四年、内閣府バリアフリーユニバーサルデザイン推進功労者表彰奨励賞を受賞し、「明るく思いやりのある子」「よく考え進んで学習する子」「健康でたくましい子」の育成を目標に、図書館教育・読書指導を核として、家庭・地域とともに教育活動を展開している。

新校舎の設計　一九七二年に竣工（しゅんこう）し、築四〇年近く経過した校舎は、元々耐震補強工事をおこなう方針であった（2―4―34）。しかし、耐震診断の結果、当初の方針の是非について改めて検討することとなった。その結果、学校敷地南側の隣接地を買収できる目途がたったことから、校舎を新築する方針に変更した。

方針は変更したものの、仮設校舎費用が多額となることから、既存施設を利用しながらの建設を前提としたため、校舎・体育館・プールの配置が難しく、校舎の日照の問題も挙がった。さらに運動場が校舎北側になることや災害時における避難所とするためには浸水状況も考慮せねばならなかった。それらの課題を踏まえ、特色のある図書館活動ができる設計も求められていたことから、新築にあたり、調整や設計は困難を極めた。

二〇一二年三月、新校舎・屋内運動場が竣工し、校区住民への学校内覧会を開催した（2―4―35）。南小学校区は、同校卒業生が何世代にもわたる家庭も多く、老若男女の参

加があった。

新校舎は、広々とした中央階段、シンボル的なデザインの図書館、オープンスペースをフレキシブルに使って授業ができる教室を配置した。

相撲場

今ではテレビなどで大相撲の人気はあるが、昔は秋の運動会の昼休みを利用して子ども達の相撲大会がありました。

南小学校の運動場の片隅に屋根付きの立派な土俵があって、ここで子ども達は全員一発勝負の相撲をとっていました。まさに相撲は日本の国技だという気概がありました。

昭和三十四年に相撲場がなくなったと思いますが、同年にプールができました。

（昭和二十五年生まれ）

南小学校にプールができた

住まいが秋田なので、ふだんは五条川まで行って泳ぐことはなく近所の小川で水浴び程度、夏休みになると毎日学校のプールに行きました。学校もほとんど夏休み中開放してくれましたので、毎日、昼御飯を食べたら出かけていって、先生に教えてもらってないけれど、三年生で二五m泳げるようになりました。

塩素をバケツでまいてシャワーを浴びるという形で、塩素が非常にきつく、私が卒業するころに、プールの底の隅のほうに水道管みたいなやつを引きまして、そこに穴をあけて、そこから循環して塩素が出るような形になりました。高圧電線がすぐそばにあり、金網がありました。

プールは建設会社が作るのですが、親が勤労奉仕で出ていました。最初の三月・四月は基礎工事、七月は最後の仕上げで勤労奉仕。それぞれ地区で分担して、「住民の皆さんが、自分たちの村の学校の子どものために」という想いでやってくれたという時代でした。

中学生が部活動でプールに練習に来るようになり、がっちりした体で「すごいなぁ」と見ていました。

（昭和二十五年生まれ）

大口南小学校　校舎の変遷

2-4-33　大口南小学校全景（1956年）

2-4-34　大口南小学校全景（1974年）

2-4-35　大口南小学校全景（2013年）

大口北小学校

大口北小学校は一九〇七年、町の中央部にあたり、小口城址と古くからの集落、五条川に囲まれた場所に大口第二尋常高等小学校として開校した。戦時下の一九四一年に大口村北国民学校と改称後、一九四七年に大口北小学校となった（2―4―37・38）。

一九五二年にプールが完成するまで、水泳の授業は敷地東側に隣接した五条川でおこなわれていた。当時の在校生の多くは、この経験が印象に残っている。

「よく考える子、きまり正しい子、たくましい子」の育成を掲げ、児童が生涯にわたり成長を続けていく基盤となる力を養い、知・徳・体の調和を図るための教育活動を現在に至るまで進めている。

昭和後期には、「はだしの教育」に力を入れ、また、鼓笛隊を活用した音楽教育にも力を入れており、一九七二年の町制施行十周年及び役場新庁舎竣工（しゅんこう）記念の時には、五・六年生が鼓笛隊で行進した。

一九八〇年に結成した交通少年団は、一九九〇年に県警本部長表彰を受けた。なお、北小学校ＰＴＡも、一九八六年度の交通安全県民大会で愛知県知事より交通安全功労賞を受賞している。

二〇一〇年、大口北部中学校跡地に移転したことを契機に、地域と子育て連携を推進し、保育園・幼稚園との定期的な会議、地域の協力による田植え・稲刈り・餅つきの体験、伝統行事を学ぶ体験などを実施している。

新校舎の設計　老朽化した校舎の耐震補強工事を検討する中、大口北部中学校の閉校が決まった。北部中学校の校舎は比較的新しかったため、それを増改築することによって経費を抑制し移転した。従来の学校は住居密集地に立地していたことから、移転にあたっては反対意見が根強かったが、学校区全体として通学距離で恩恵を受ける児童は少ないものの、学校区の中央に寄る位置にはなるということで合意した。二〇〇九年に始まった施設整備工事は、二〇一〇年に竣工した（2―4―39）。

増改築の際、校舎が中学校仕様であったことから、既存部分の階段や黒板、便器の高さ、プールの水深などを、小学校仕様に造り替え、増築部分の一階・二階にはオープンスペースを設けた。

小学校の水泳

昔、北小学校の東側に五条川の天然プールがあり、「ゆのしま」と呼んでいました。一緒にヘビやドジョウ、ヒルも泳いでいました。

（昭和十五年生まれ）

南小学校にはまだプールが無かったため、学校の近くを流れる五条川の秋葉橋のたもとで代表選手の選考がおこなわれました。子ども達は夏になると、喜んで泳いでいました。

代表選手になり、北小学校でおこなわれた村の大会に出ました。初めてのプールで、初の飛び込み台からの飛び込み、無我夢中で泳いだ記憶があります。

（昭和二十一年生まれ）

北小のプールは五条川から水を取り入れていて、練習前に丹念に藻を取りました。

（昭和十九年生まれ）

北小学校の思い出

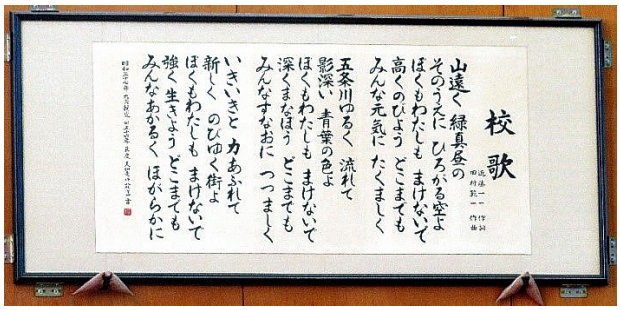
北小にも、藤棚っぽいものがあって、その下にテーブルと椅子があって、そこで給食を食べました。北小は、はだしの教育というのがあって、校庭に小さい石があって痛かったし、運動会もはだしで、夏は熱かったです。

制服は男子が茶色、女子が緑、夏は女子が白いブラウスに赤いリボン。帽子は夏がグレー、冬が赤白帽だったかも。

（昭和三十七年生まれ）

愛知万博の大口デーで、大正琴を弾きました。

（平成四年生まれ）



2-4-36　大口北小学校校歌額（2022年撮影）

大口北小学校　校舎の変遷

2-4-37　大口北小学校全景（1956年）

2-4-38　木造校舎とならぶ新築校舎（「卒業記念」1974年３月）

2-4-39　大口北小学校全景（2010年）

大口西小学校

大口西小学校は、人口増加にともない、一九七六年に大口北小学校から学校区を分離して開校した（2―4―40）。

校区は名鉄柏森駅に隣接し、区画整理事業が実施されたことから開校当時より人口が急増した地域だった。

一九九二年にみどりの少年団を結団、一九九七年には文部大臣（現文部科学大臣）より学校給食優良校として表彰された。

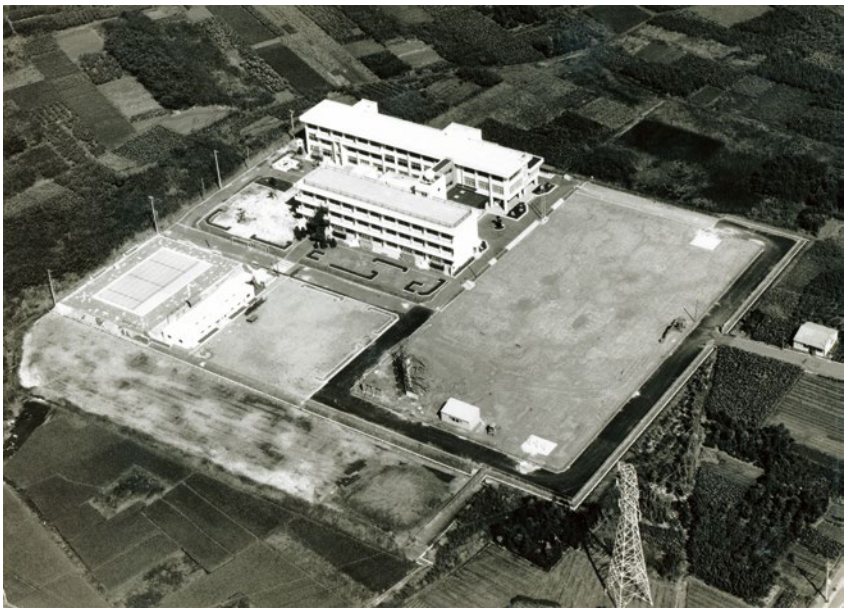
また、区画整理事業実施時には、学校用地を買収して拡張しており、校舎北側に未利用地があったことから、当時の校長が発案し、地元住民・建設業者・在校児童が協働して、ビオトープを建設した。その後、住民有志と学校による西っ子里山クラブを組織し、ビオトープを学習の場に組み込んで活動を継続した（第一編第二章第二節・第二編第三章第五節）。これが評価され、二〇一〇年、全国学校ビオトープコンクールで銀賞を受賞した。

その他にも地域と学校が手を携えて、グラウンドゴルフ・大正琴・稲作などの体験学習をおこない、児童の生きる力を育む教育活動を推進している。

校舎の改築設計　開校してから、耐震補強工事や校舎増築、部分的な改修工事は実施していたが、大口北小学校、大口南小学校の整備終了後、築四〇年を経過した校舎の再整備が課題となっていた（2―4―41）。校区住民からは、他校にならい全面的な改築の声もあったが、国が耐用年数の目途を八〇年程度に延長したこと、将来的に児童数の増加は見込めないことなどから、学習環境の改善を目指して、設備を一新することで、向こう三〇年程度の使用に耐えうる校舎へと改修した。

事業費を抑制するため、通常の教育活動を継続しながら整備工事を進めることとし、二〇二一（令和三）年度に実施設計をおこない、二〇二二年度から二か年の工期で着手した。整備事業では、過去の増築時に見送られた児童玄関の増築や、給食配膳室と給食配膳用エレベーターを移設して搬入車両の導線の整理、さらには、トイレの全面改修や音楽室の移設、図書室を拡張してメディアルームとするなど、校舎の構造は古いものの、内部は一新する計画とした。また、南棟と北棟の間にある中庭も従来は利用されていなかったが、雨天時でも児童が集える場となるよう、低層ながらシンボル的な屋根を設置する計画も盛り込んだ。

大口西小学校　校舎の様子



2-4-40　大口西小学校全景（1976年）

2-4-41　大口西小学校校舎（2017年撮影）

中学校のあゆみ

大口中学校

一九四七年、大口町域の中心にあたり、当時は大字大屋敷字植松という地名で、ちょうど河岸段丘の縁であったため、通称「植松の丘」と呼ばれていた場所に大口村立大口中学校が誕生した。しかし、校舎の竣工（しゅんこう）が開校に間に合わず、最初の半年は大口南小学校と大口北小学校に分教場を設置して授業をおこなった。

校舎竣工直後に図書館を設置して図書館経営研究会議を開催したり、翌年には生徒有志による伊吹山登山の開始、村民総出で運動場の整備作業がおこなわれたりした。さらに、一九五〇年に建設した大口村公民館は、中学校の講堂を兼ねており、青年学級や成人学級が開講されていたことから、当時から大口中学校は、生涯学習活動の拠点であった（2―4―48）。

開校間もない一九五〇年度の教育目標は、「封建性が強く自主性に乏しい純農村を環境とするのに鑑み、新時代を目標とする近代感覚を教育に活かし、感覚鋭い青年前期の生徒の個性豊かな人間性の成育を図り、勤勉にして誠実、正義と真理を愛し、実行力旺盛な『社会実践者へ』の本校教育目標のもと民主教育の徹底を期す」とした。

一九五五年には、生徒の理想像を次のとおり示した。「一　明朗な生徒　二　健康な生徒　三　常に希望をもった生々（いきいき）とした生徒　四　自主性、公正な判断力に富む生徒　五　勤労、責任、創意、工夫する生徒」

その後、表現を変えながらも教育目標は初期に掲げた「実行力旺盛な社会実践者へ」を踏襲し、一九八〇年代には生徒実践目標として、「自ら学び　自ら鍛え　自ら磨く」を定め、以後、二〇〇八年三月の閉校まで引き継いだ（2―4―49）。

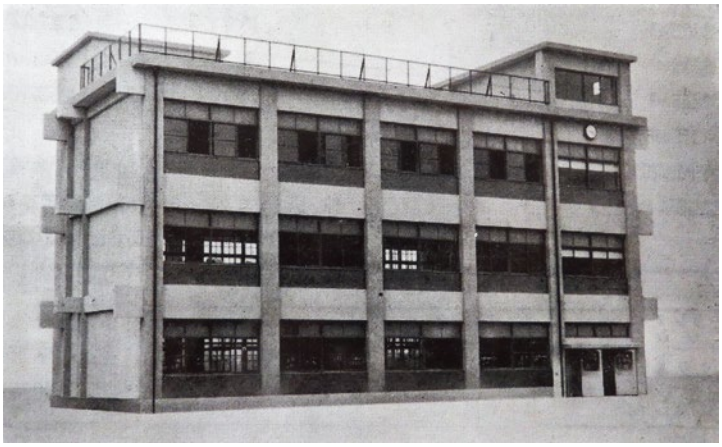
また、学校の受賞歴からも、様々な活動に取り組んだ様子がうかがえる（2―4―42）。

一九五九年の伊勢湾台風では、木造校舎三棟のうち、一棟が倒壊した

	受　賞　歴
1959	東海三県学校図書館コンクール最優秀賞
1982	学校給食文部大臣表彰
1991	保健活動優良校（県教育委員会特別優秀賞）
1995	優良PTA文部大臣表彰
1998	ボランティア活動（県知事感謝状）
2004	読書ゆうびんコンテスト （日本郵政公社東海支社長賞）

2-4-42　大口中学校の受賞歴

（第一編第三章第三節）。その直後に防衛庁（現防衛省）の防衛施設周辺防音事業補助金を得て、一九六一年四月に、鉄筋コンクリート三階建ての校舎を竣工した（2―4―43）。学校日誌によると、一九六〇年三月二十四日、小牧基地から自衛官が三人、騒音調査のために来校したとある。



2-4-43　1961年に竣工した鉄筋コンクリートの校舎

新しい校舎

伊勢湾台風で、木造校舎の倒壊を目の当たりにした二年後、管内でも初めてだったでしょうか、鉄筋コンクリート三階建ての立派な校舎を建てていただきました。のちに増築されたとき、あの校舎だけが少し向きが違っていました。私が聞いた話だと、補助金の関係だったでしょうか。どうしても真南に向いて建てないといけなかったのだそうです。

（大正十五年生まれ）

大中の赤ふん

五条川のマルト（現大屋敷二丁目にあった製麺所）前から川上に向かって泳ぐ練習を繰り返しました。五〇m地点に竹竿（たけざお）で目印が作ってありました。

三年生の時、南小にプールができたので練習に行きましたが、背も高くなっていたので底に手がついてしまい、飛び込むときにも気を付けました。

この、五条川での猛練習のおかげで、管内大会（丹葉）で一三連覇を果たすことができ、大中水泳部は強かった。当時、「大中の赤フン」と有名でした。

（昭和十九年生まれ）

校舎前庭には三つの像を配置し、「憩いの森」と称して、生徒たちに愛され、潤いと安らぎと内省の場として親しまれていた（2―4―44～46）。

立志の塔（一九七七年建立）

「青春の一日一日が共にあった
ここ植松の丘…
十有五にして志を立てる」

2-4-44　立志の塔
（1977年）

三省の像（一九八三年建立）

「われ、三たびわが身を省みる」

2-4-45　三省の像
（2022年撮影）

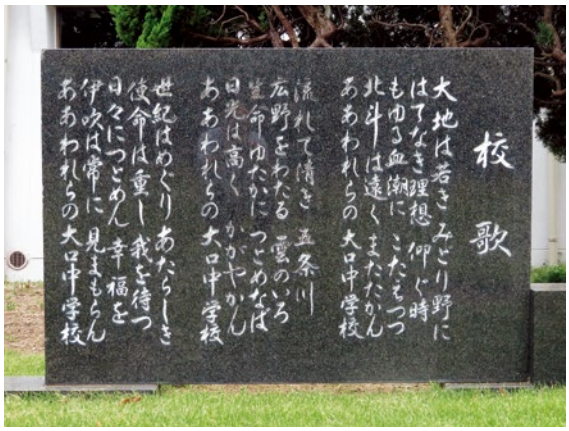
望みの像（一九八四年建立）

「果てしなき地平線よりわきたつ
ように昇る太陽」

2-4-46　望みの像
（2022年撮影）

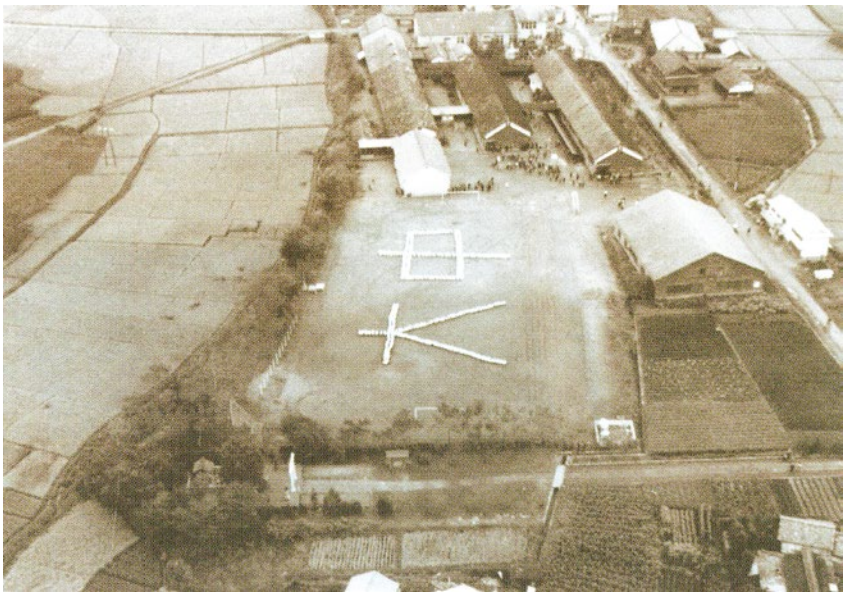
一九八五年四月、生徒急増により、大口北部中学校が大口中学校から分離開校したが、約二〇年で生徒数が減少し、二〇〇八年に両中学校を統合することとなった。

開校から六一年を迎えた学び舎からの卒業生は、約一万六五〇人にのぼり、町内はもとより各地でそれぞれの人生を歩まれ、活躍されている。歴代の卒業生が築いた足跡や教職員をはじめとする関係者の尽力・業績は新生大口中学校創立の礎として引き継がれた（2―4―47）。



2-4-47　旧大口中学校 校歌碑（2021年撮影）

大口中学校　校舎の変遷



2-4-48　大口中学校全景（1956年）

2-4-49　大口中学校全景（1997年）

大口北部中学校

一九八五年四月、大口中学校より分離開校した（2―4―54）。校訓を「勉強好き、運動好き、きれい好き」と定め、「心に大きな希望を持ち、小さな実践を毎日続ける」を生活信条に掲げ、教育理念を込めた三つの像を設置した（2―4―50～52）。これらの像は大口北小学校敷地内に残されている。

立志の塔（一九八八年建立）
「卒業を前に将来への志を決意を持つ」

2-4-50 立志の塔
（2022年撮影）

友愛の像（一九九二年建立）
「仲間とともに学校生活の充実を願う」

2-4-51　友愛の像
（2022年撮影）

大望の像（一九九七年建立）
「小さな実践の積み重ねが大きな成果となることを表する」

2-4-52　大望の像
（2022年撮影）

また、全国的にも青少年の非行が低年齢化し、社会問題として取り上げられるようになってきた折には、「ストップ・ザ・いじめ」実践研究会の開催と「ジュニアフォーラム98」への参加に取り組んだ。二〇〇三年から二〇〇四年には、愛知県教育委員会より委嘱された健康推進学校の研究実践をおこなったことで、二〇〇五年に健康教育推進学校優良校として表彰を受けた。

その他にも、新設校がゆえに様々な分野で活動を展開し、二〇〇五年には東海吹奏楽コンクール優秀賞、二〇〇六年に第二十回毎日カップ中学生体力つくりコンテスト努力賞なども受賞した。

二〇年余の弛（たゆ）まぬ教育活動によって徐々に校風が醸成されていたが、生徒の減少により学級や部活動などの集団活動にも支障が出始めていた。このため、二〇〇七年度をもってその歴史に幕を閉じることとなった（2―4―55）。

二三年にわたる教育活動や数々の思い出は、卒業生の心に深く刻まれ、校歌が刻まれた石碑も大口北小学校敷地内に残っており、北部中学校の痕跡を偲（しの）ぶことができる（2―4―53）。

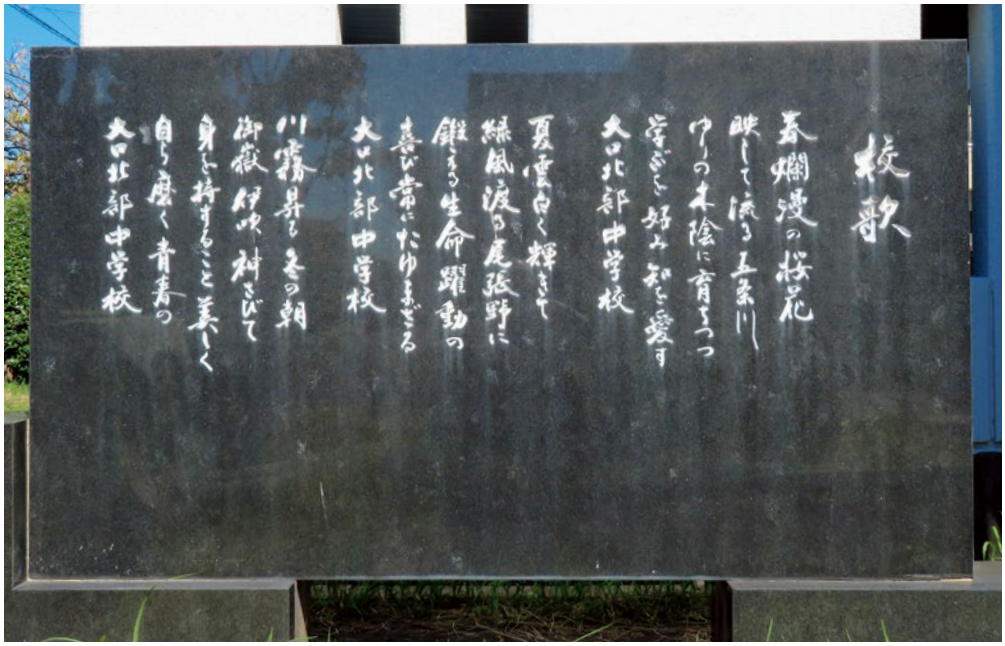
大口北部中学校の思い出

開校の年、一年生として北部中学校に入学した。すべてが真新しく新鮮であった。あれからもう二〇年も経つのだ、早いものだ。北部中学校がなくなるのは正直寂しい。同窓会でも開いて当時を思い出したいな。

校舎が新しく、良い環境で中学校生活を送れました。部活動は特に思い出深いです。北中出身として母校がなくなるのはとても寂しいですが、また新しい中学校で、さらに「ハイテクの町、大口町」になってほしいです。

開校十周年記念の航空写真、大きなサツマイモを育てた収穫祭、暑い中はクーラーをつけての授業はありがたい環境でした。

（これらの思い出は、二〇〇七年に大口町歴史民俗資料館で開催した企画展「中学校の思い出～二つの学校への思いを新しい学校へつなぐ～」に来館した大口北部中学校卒業生の残したコメントです）



2-4-53　旧大口北部中学校 校歌碑（2022年撮影）

大口北部中学校　校舎の様子

2-4-54　大口北部中学校全景（1985年）

2-4-55　大口北部中学校校舎（2008年）

新生大口中学校

二〇〇八年四月、大口中学校と大口北部中学校が統合して、新生大口中学校が開校した（2―4―56・57）。

両中学校の統合にあたり、大口町生涯学習基本構想の下、学校関係者による組織により、学校整備から学校運営について検討が重ねられ、校訓を「自ら学び鍛え、共に夢と友情を育む」とし、異学年交流型教科センター方式による学校運営で、自治意識・自浄能力を有する生徒の育成を目指した。

既存二校の統合ではあったが、大口北部中学校の生徒の意をくみ、両校の教職員が生徒指導や制服などについて協議を重ね、吸収合併ではなく両校の生徒によって新たな中学校を創立するという機運が高まるよう配慮した。

教職員は、全国的にも採用事例が少なく、未経験の異学年交流型教科センター方式による学校運営によって、より教育的効果を高めることに挑戦した。「異学年交流型」とは、従来であれば学年単位で行動し、学校行事・生徒会・部活動で異学年の生徒と交わる機会が生じるが、これとは違い、教室の配置を学年縦割りグループの単位として横並びとし、日常的に異学年の生徒が交流することで学齢に応じた役割を担い、より生徒の主体的な能力の育成を目指したものである。

また、「教科センター方式」とは、教科担任が生徒の待つ教室へ出向いて授業をおこなうのではなく、教科毎に授業をおこなう教室が決まっており、生徒は時間割に合わせてその教室へ移動するもので、この方式により、生徒がより主体的な学習に取り組む意欲を高める効果が期待できるとされている。さらに校舎の各階ごとに教科専用教室が固められ、そこには教科教員室とフリースペースの教科ラウンジを配置した。

しかし、周辺自治体では採用事例がないため、一定期間で異動する教職員にとってその運用は容易ではなく、異学年交流についても、具体的な活動となる行事をいくつか用意しブロック活動と位置づけ展開した。ブロック活動は、アンケート調査によれば一定の成果は認められるものの、生徒会活動や学年交流の面で課題が残った。

二〇二一年、新型コロナウイルス感染症対策の観点から人流を避けなければならなくなり、授業以外の行事も制約を受けることになった。このため、発展的に一旦、授業を受けるための生徒の移動とブロック活動を中止した。

大口中学校　校舎の様子

2-4-56　大口中学校校舎全景（2009年）

2-4-57　大口中学校正門（2009年）

学校生活

国の施策への対応　一学級の児童生徒数は、一九四七年に施行した学校教育法施行規則で五〇人以下と定められ、一九五八年、義務教育水準の全国的な維持・向上に資することを目的として「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」が制定された。この時、一学級五〇人以下は変わらず、一九六三年の改正により翌年度から一学級四五人以下を標準とした。この法律は、各都道府県が標準人数を下回る基準で定めることができ、さらに市町村も実態に即して基準を下回る人数に定めることができた。町では、県の基準に基づき、国の標準人数より少ない人数で学級編成をおこなった（2―4―58）。

学校週五日制は、一九九二年から段階的に導入され、二〇〇二年度から完全実施した。二〇〇二年は、企業や公務員を中心に週休二日制が定着した年でもあった（2―4―59）。

国	愛知県（大口町）
1947年 上限50人	
1964年 上限45人	
1980年 上限40人	
	2004年 上限35人（小学1年生のみ）
	2008年 上限35人（小学1・2年生）
2011年 上限35人（小学1年生のみ）	
2021年 上限35人（小学1・2年生） ～ ↓ 2025年 上限35人（小学校全体） ※段階的に35人へと引き下げ。	2021年 上限35人（小学1-3年生） ～ ↓ 2024年 上限35人（小学校全体） ※段階的に35人へと引き下げ。

2-4-58　1学級の人数上限の変遷

年度	施　策
1980	小学校教育課程の改訂（ゆとりある充実した学校生活の実現）実施 ※中学校は1981年から実施
1989	小学校１・２年生の理科・社会を廃止、生活科の新設
1992	月１回の学校週５日制実施（第2土曜日休み 9月12日～）
1995	月２回の学校週５日制実施（第2.4土曜日休み 4月22日～）
2002	完全学校週５日制実施（毎週土曜日休み 4月6日～）
2011	小学校 外国語活動の導入
2018	小学校 道徳教科化
2019	中学校 道徳教科化

2-4-59　学校生活に関する制度の変化

勤労奉仕　アジア・太平洋戦争中の小学校では、児童が校庭で畑を耕し野菜を作り、どんぐりの収集やイナゴの捕獲など食料の確保をおこなった。この他、軍用の毛皮需要に応えて兎（うさぎ）の飼育、戦闘機の燃料となる「ひまし」の栽培、出征家族に対する農作業の手伝い、戦死者の葬儀参列など、戦争に直結した活動ばかりであった。

戦後、学校での作業は、学校区の保護者を中心に割り当てられた。大口南小学校では、日常的に校庭の整備や校舎の補修、一九五九年のプール建設工事、伊勢湾台風の修繕など新規工事や、災害時の修繕で勤労奉仕に動員された。この状況は、大口北小学校でも同様であった。

中学校は、一九四七年の前半まで校舎が完成していなかったため、南小学校と北小学校に分かれての授業だったが、同年五月に建設予定地の小石運搬と地盤固めを生徒が手伝った。第一校舎が完成し授業が始まると、第二校舎の敷地の小石運搬と地盤固めを生徒とＰＴＡが手伝い、一九五四年には、理科教室の整備をＰＴＡが分担しておこなった。

一九六〇年代に入ると、ＰＴＡに依頼せず、生徒による勤労奉仕が盛んになった。一九六五年まで、春と秋になると生徒による学校周辺の道路整備がおこなわれた。また、一九五九年には五条川堤防の草刈り、その翌年、翌々年には桜の補植を手伝った。これは、伊勢湾台風の影響と思われる。

勤労奉仕

中学生の時、道が砂利道で、わだちができて砂利が少しずつ淵（ふち）へと動くので、中央に戻す作業をやった覚えがあります。

（昭和十九年生まれ）

農繁休暇

小学校では、五月末から六月上旬の一週間を養蚕休暇、七月上旬から一週間を田植え休暇、十一月中下旬の三日間を稲刈り休暇とした。中学校は、養蚕・麦刈り・田植え・稲刈りでそれぞれ三～七日間にわたって実施され、一九六二年頃まで続いた。農繁休暇がなくなった理由として、農業の兼業化・機械化が考えられる。

農繁休暇

あの頃は、百姓というのは非常に手間がかかりましたので、小学生といえども、大事な働き手ということになるので、手伝ってもらわないかんということで、休みがありました。

調べてみますと、昭和三十二年には六月十一日から三日間、七月にも三日間、それから、十一月にも四日間の農繁休暇。今、こんなに学校を休んだら、指導要領どおりやれるのかと思う位ですが、昔はそういうのはどうだったのかなあ。

多分、六月は麦の収穫、七月は田植え、十一月は稲刈りのためです。もっと前は、養蚕休みもあったそうですが、私らが入学した頃にはありませんでした。中学校にも、もちろん農繁休暇がありました。

小学生低学年ですと、なかなか田植えも難しいので、子守をしたり家の留守番をしたりして頑張っていました。

私の住む集落では、ほ場整備される前ですので、ちっちゃな田んぼの田植えを共同でやりました。集会場に炊事場をつくって、昼と夜、料理をつくる人、田植えをする人、それから子守をする人。主婦連というか婦人会というのが割と活発でした。

（昭和二十五年生まれ）

制服

町内の小学校では、制服を採用していた時期があった（2—4—60）。

南小学校は、採用する前年を移行期間とし、一九六八年から制服が義務付けられたが、一九九八年に自由化となった。同年、北小学校では新入生が着用せず、在校生も着用自由となった。西小学校は、開校年に制服が間に合わず、新一年生から六年生まで北小学校の制服を着ていた。胸の校章のみ西小学校の校章の刺繍（ししゅう）が配られ、それを家で縫い付けて登校した。その後、児童は体の成長のため、制服を買い替える際、新しい制服を購入することにより、徐々に統一した。北小学校同様、一九九八年に新入生は着用せず、在校生も着用自由化となった。

2-4-60　上：北小学校制服（1979年頃）
下：西小学校制服（1977年頃）
（大口町歴史民俗資料館所蔵）

制服の思い出

子どもは西小学校に通っていました。入学時（平成十年）、すでに制服が廃止されていたので、毎日、何を着せていこうか考えるのが面倒でした。制服があれば買うときはお金がかかるから大変かもしれないけれど、あとは毎日制服を着せていけばいいので楽かもしれないなどと思っていました。

（昭和三十七年生まれ）

南小学校の制服は、男女同じデザインで、男が左を前にしてボタンをかけ、女は右を前にボタンをかける形で、「スモック」と呼ばれていました（2―4―61）。毎日制服を着ていくことが当たり前と思っていました。

（昭和三十八年生まれ）

2-4-61　南小学校制服

遊び

学校ごと、時代ごとに、学校内の遊びは変化した。

遊ぶ時間帯は、登校して朝礼が始まる前、二限目と三限目の間にある少し長めの休み時間（放課）、給食後の昼休み（昼放課）などである。

帰宅後に友達と少人数で遊ぶのとは異なり、異学年・大人数で遊ぶことができるのは学校ならではであり、上級生が下級生の面倒をみるよい機会であった。

鬼ごっことかくれんぼの要素を進化させた「ポコペン」や「ドロケイ（泥棒と警察）」をはじめ、球技では、ドッジボール・フットベースボール・家からゴムボールを持参してハンドテニスがよくおこなわれた。ほかにも、校庭の遊具である鉄棒や登り棒など、様々な遊びがあった。

一九九〇年代に入ると、一輪車で様々な技術を習得するため、夢中で練習する子どもの姿も見られた。また、大人数では、ドッジボール・大縄跳びがおこなわれた。

かつて、北小学校の校庭には「おとぎの山」、西小学校には「西っ子ランド」と呼ばれる遊び場があった。

道草

私は昭和二十二年に北小学校に入学しました。一年生の時は、毎朝、上級生がカバンを持ってくれますが、外坪から、かけ声を出して毎朝学校まで走ります。

当時は、五条川の改修工事がおこなわれており、川底に置いてあるトロッコが珍しかったです。トロッコは、川底の石を上の道路まで運び出します。勿論レールが敷いてあり川底から、発動機でワイヤーを巻き上げながらトロッコを引き上げます。そのトロッコをいたずらに押して遊ぶのが楽しかったです。

（昭和十五年生まれ）

私が小学生のときは、まだ西小がなかったので北小に通っていました。朝、集合場所に集まるとポコペンやゴム飛びをしてから出発し、朝日に向かって三〇分ほど歩きます。学校生活は多分今とあまり変わりません。放課はドッジボールや遊具で遊びました。給食は二年生までは牛乳ではなく、飲みづらい脱脂粉乳でした。先生は今より厳しかったかもしれません。校舎の玄関の横に大きな熱帯植物があり、ずっとバナナの木と思っていたが六年間バナナが実ることはありませんでした。帰りは遊びながら帰ったので一時間ぐらいかかりました。途中の白山社に必ず寄って、鬼ごっこなどをしました。道沿いの用水路に笹舟を流したり、垣根のクモの巣を枝に巻き付けながら歩いたりもしました。小学校を卒業してから数年後に家から五〇〇mのところに西小学校ができてうらやましかったですが、六年間歩いたおかげか足腰は丈夫な方だと思います。

（昭和三十七年生まれ）

西小学校では、ウサギを飼っていて、白っぽいのがミルキー、白黒がモノクロという名前でした。ビオトープが有名で、夜家族と蛍を見に行きました。一・二年生のときは西っ子ランドでよく遊びました（2—4—62）。

（平成十四年生まれ）

2-4-62　西っ子ランド（1981年）
※西っ子ランドは1980年使用開始。
（『開校10年のあゆみ』）

小学校の遠足

一九五〇年代は、東山公園・丸山ダム（岐阜県八百津町）、また金華山（岐阜県岐阜市）などバスを利用して出かけていった。一九六〇年代以降は、春と秋のどちらかを体力強化を兼ねた徒歩での遠足とし、もう一方を少し遠出する行き先に設定するようになった（2―4―63）。

徒歩での行先は、一・二年生が町内各所や曽本二子山古墳（江南市曽本町）、三・四年生が小牧山・岩崎山、五・六年生が尾張富士など、歩ける距離での遠足であった。

	春（4月26日）	秋（11月1日）
1年生	岩崎山	犬山
2年生		
3年生	知多朝倉海岸 潮干狩り	継鹿尾山
4年生		
5年生		桃太郎屋敷
6年生		

南小学校の遠足（1960年）

	春（4月27日）	秋（10月27日）
1年生	岩崎山	東山公園
2年生		
3年生	大縣神社	岡崎公園
4年生		
5年生	尾張富士	瑞浪化石博物館
6年生		

西小学校の遠足（1977年）

	春（4月26日）	秋（11月1日）
1年生	余野中央公園 白山ふれあいの森	東山動物園
2年生		名古屋港水族館
3年生	堀尾跡公園 白山ふれあいの森	淡水魚水族館
4年生	環境美化センター 磨墨ふれあいの広場	輪中の郷・ 木曽三川公園
5年生	※別日に自然教室があるため、実施せず。	電気の科学館 産業技術記念館
6年生	青塚古墳史跡公園	瑞浪化石博物館 サイエンスワールド

北小学校の遠足（2009年）

2-4-63　各小学校の遠足の行き先

南小学校の社会見学

六年生に社会見学に行きました。中日新聞や大口出身の舟橋さんが開いたシヤチハタという会社、小牧の飛行場を見て歩きました。中日新聞では、屋上へ行って、まだあのころは伝書バトが飼われておったんです。伝書バトでライカンをつけて、新聞記者が本社に記事を送るというのがありました。お土産じゃないですけど、ハトをかごに入れて貸してもらえたんです。学校へ戻ってきて、ハトにお礼の手紙をかけて、飛ばしたことを覚えています。

（昭和二十五年生まれ）

遠足

一学期の遠足で、電車に乗っていったと思いますが、知多半島のほうへ潮干狩りに行きました。まだ海へそんなに連れていってもらったこともない時代ですので、海を見てはしゃぎ、貝を採る。アサリがわからなくて、おいしくない貝をとって喜んでいたら、「おまえはあほか。こっちが本当のアサリだよ」と見せてもらって採った覚えがあります。遠足へ行って晩のおかずを採ってくる、今では考えられないような時代でした。

（昭和十五年生まれ）

修学旅行

一九六〇年代まで、小学校の修学旅行先は、伊勢・志摩方面で、中学校は京都が中心であった。一九七〇年代以降、小学校が京都・奈良に行き先を変更すると、中学校も関東方面に変更した。小学校は、神社仏閣を見学するのに対し、中学校は国会議事堂や日光東照宮の見学が定番であった。しかし中学校では、生徒の自主性を育むため、都内をグループで行動させるようになり、行程にテーマパークを入れるなど多様化した。

小学校の修学旅行

私が入学した頃は、伊勢方面でした。修学旅行へ行くときは近鉄電車でしたか、あおぞら号が始まり出したころで、私もあおぞら号で出かけました。伊勢神宮の内宮と外宮を参拝しました。赤福餅というのはあまり記憶がなくてコンペイトウという、何かひし形のベース板みたいなような形のものがお土産で、業者さんに袋をもらって買いました。真珠島もあのころは船に乗らないと行けなくて、その船に乗ったついでに海女さんの実演を見せてもらったり、真珠島で貝の移植をするところを見せてもらったりしました。

（昭和二十五年生まれ）

中学校の遠足

大口中学校は、一九四八年から、二年生の夏の行事として伊吹山登山が始まり、一九六三年まで一五年間続いた。行事当日は夕方に中学校を出発し、夜中にかけて伊吹山の山頂を目指し登った。山頂に到着後、ご来光を拝んで下山した。参加した中学生にとっては、思い出に残る行事であった。当初は、伊吹山の麓まで列車で行ったが、一九五〇年代半ばあたりから、バスに乗って移動した。最終年度となった一九六三年は、一年生も参加した（2―4―64）。

2-4-64　伊吹山山頂にて（1951年）

伊吹山登山

一九四八年から、大口中学校では伊吹山登山が二年生の行事となっていました。夕方、学級毎にバスで学校を出発して岐阜県・伊吹山に向かいました。少しはなれた神社まで歩き、午後十一時頃なのに店はにぎやかでした。水はとても冷たく、水筒へ水をつめてから出発です。

先頭と最後に大口中の提灯（ちょうちん）をつけて歩きました。背丈ほどの草の茂る山道の中を、同行する先生の持つ懐中電灯の光を頼りに登りました。中学生のため、にぎやかで、全く疲れも感じず暗い内に頂上に着き、ご来光の上がるのを待ちました。つゆが降りて靴はビタビタでした。

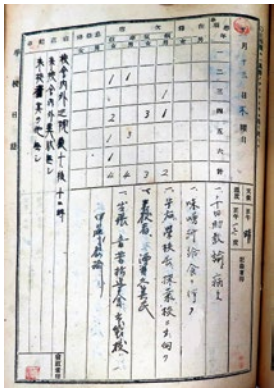
この日は晴天。周りが白々と明ける中、「オウ！」何と美しいのでしょう。あの山々は、下は雲が降り山々は新鮮な濃い青、北アルプスが連なり高山植物がおいしげり、ほんとうに気持ちがよかったです。と同時に寒いということが分かりました。太陽が山の間から顔を上げ出しました。御来光です。初めて山に登って見ました。太陽が山霧の中から赤い色をして昇り出しました。時は五時頃でした。そのうちに順々と記念の写真をうつしていきました。

（昭和二十一年生まれ）

学校給食

一九四〇年代の大口南小学校・大口北小学校には給食調理室があり、校内で給食が作られていた。戦時中は、校庭でとれた野菜や授業中に児童が捕まえたイナゴを調理した。

北小学校の学校日誌によると、戦後の一九四七年六月に、毎日ではないが「全校給食」の文字が確認できる。同年十月には、児童によるイナゴ採取と「イナゴ佃煮給食」の記載があり、十一月四日に給食用ミルク（脱脂粉乳）の受け取り以降、「ミルク給食」「味噌汁給食」の記述が多くなる。「味噌汁給食」の際は、地区ごとに数人の保護者が来校し給食の手伝いをした（2—4—65）。一九五〇年代後半、両校ともミルク・パン・おかずの給食が定着した。しかし、中学校では、後に学校給食センターを建設するまで弁当持参であった。



2-4-65　北小学校 学校日誌
（1947年11月13日）
「味噌汁給食ヲ行フ」とある。

給食の思い出

給食室をのぞくと大きな釜があって、れんがづくりかタイル張りの大きな釜や流しがありました。最初のころはお野菜の日があり、田舎ですので野菜はみんなとれるので、新聞紙にくるんで学校へ持っていって、その野菜を使って、給食のおばさんたち、友達の親もおったような気もしますが、給食をつくっておってくれました。今みたいに立派な給食ではなかったです。

特に苦手なのは脱脂粉乳というもので、お湯で溶いて、牛乳とは言わないんですが、ペンギンのくちばしみたいなポットに入っておって、それを注ぎます（2—4—66）。あのころプラスチックも出始めたころで、金属の食器もまだありましたので、熱いのは熱くて持てませんでした。それから、今は貴重品ですが、鯨の肉はよく出たなあという記憶があります。

（昭和二十五年生まれ）

2-4-66　ミルクポット
（大口町歴史民俗資料館所蔵）

学校給食センターの建設　一九七二年三月に大口町学校給食センターが竣工し（2―4―67）、同年四月から小学校二校と中学校に通う児童・生徒のため、約二〇〇〇食が作られるようになり、町内全小・中学校で同じメニューが提供できるようになった。以降、衛生管理・栄養管理・給食費の軽減に努めながら運営してきた。

その後、児童・生徒数の増加、副食のバリエーションの増加、施設の衛生面・管理面・耐久性を考慮し、一九八八年九月に施設を一新した。新しいセンターは、調理能力四〇〇〇食、厨房方式はフルドライシステムにより床が常に乾いた状態で、湿度を低く保つことにより細菌の繁殖を少なくし、床面からの跳ね水もない衛生管理に優れた施設に生まれ変わった（2―4―68）。

二〇一二年には一部の設備を新調し、食育・地産地消といった施策などに取り組みながら、児童・生徒の学校生活を支えるため、美味しい給食の提供に努めている。

2-4-67　学校給食センター（1972年竣工当時）

2-4-68　学校給食センター（2022年撮影）

献立と食器　戦後の復興期には国全体で慢性的な米不足に陥っていたが、一九六〇年代後半ごろからは、米が余るようになっていた。しかし、多くの給食施設では一度に多くの米を炊飯する器具が整備されておらず、米飯給食の実施には時間がかかった。学校給食センター開所当初の献立は、パン・牛乳・おかず・果物類であった。パンは、スライスパン・コッペパン・黒パンにマーガリン・ジャム類がついた。その後、月に一回程度、パンの代わりにソフト麺とカレー、五目御飯の日もあった。一九七七年九月からは、週に一度、五目御飯やピラフが出され、徐々にパンと米飯の割合が逆転した。一九八〇年代後半には、米飯給食が主流となった（2―4―69）。

2-4-69　1970年代末の給食

コッペパン

給食センターができて、町内同一献立で始まった四月の献立（2―4―70）です。ハムサンド、牛乳、ドレッシングあえ、主食はスライスパン・コッペパン・コッペパン・コッペパン・黒パン・コッペパンというようにコッペパンが主でした。

給食センターが新しくなってから、主食はごはんの日が多くなりました。今では逆にパンの日が月に数回となっています（2―4―71）。

4 月 分 献 立 表　　大口町立学校給食センター

日	曜	献立名		おもな材料名
6	木	（ハムサンド） 牛乳	ドレッシングあえ ぜんざい	ハム・キャベツ・にんじん・のり・リンゴ あずき・マカロニ
7	金	スライスパン マーガリン 牛乳	親子煮・バナナ	鶏肉・卵・じゃがいも・たまねぎ・にんじん 五月豆
10	月	コッペパン ホイップバン 牛乳	ズパゲティミートソース あえ・みつまめ	豚肉・スパゲティ・たまねぎ・キャベツ・にんじん・グリンピース
11	火	コッペパン マーガリン 牛乳	豚肉とじゃがいものうま煮	豚肉・はんぺい・じゃがいも・たまねぎ・にんじん・五月豆
12	水	コッペパン チョコレートジャム 牛乳	魚フライ・おしたし	魚・キャベツ・にんじん・・ほうれん草
13	木	（黒 パ ン） 牛乳	クリーム煮・ウィンナソーセージ・チーズ	豚肉・じゃがいも・たまねぎ・キャベツ・にんじん・グリンピース
14	金	コッペパン マーガリン 牛乳	かわりギンビラ あべかわ	鶏肉・きつまあげ・ごぼう・にんじん・マカロニ きなこ
17	月	（カレーメン） 牛乳	アメリカンホットドッグ 夏みかん	豚肉・じゃがいも・にんじん・たまねぎ・ グリンピース
18	火	スライスパン イチゴジャム 牛乳	いそ煮・ゆでたまご	鶏肉・きつまあげ・大豆・ひじき・にんじん
19	水	スライスパン マーガリン 牛乳	ハヤシシチュー しゅうまい	豚肉・じゃがいも・たまねぎ・にんじん・ グリンピース
20	木	スライスパン チョコレートジャム 牛乳	クラスチック マカロニサラダ	クラスチック・キャベツ・にんじん・ キュウリ　リンゴ・ハム・卵
21	金	スライスパン マーガリン 牛乳	すきやき風煮 かまぼこウィンナー	牛肉・生あげ・かまぼこ・ねぎ・じゃがいも たまねぎ・はくさい
24	月	コッペパン マーガリン 牛乳	焼きそば もも（缶詰）	イカ・ハム・かまぼこ・焼きそば・キャベツ もやし・にんじん
25	火	コッペパン ハチミツ 牛乳	豆腐の中華風煮 夏みかん	豚肉・とうふ・たまねぎ・にんじん・たけのこ グリンピース
26	水	コッペパン マーガリン 牛乳	ご目煮豆・ゆでたまご	豚肉・大豆・ちくわ・じゃがいも・卵・ごぼう こんぶ・にんじん
27	木	（黒 パ ン） 牛乳	鯨のケチャップ煮 チーズ	鯨肉・じゃがいも・たまねぎ・にんじん・グリンピース
28	金	コッペパン イチゴジャム 牛乳	コロッケ・かきたま汁	コロッケ・とうふ・鶏肉・卵・たまねぎ・にんじん・グリンピース

〈献立説明〉 ◉ハムサンドーパンにマヨネーズをぬって、ハムをはさんで食べる
◉カレーめんーカレー汁をいれた食器に少しづつめんをいれて食べる。

2-4-70　1972年４月の献立表（「広報おおぐち」1972年４月号）

小学校　　大口町学校給食センター

4月分給食献立表

日	曜	献立名 主食	献立名 主菜、副菜、その他の順	体の中でのはたらき おもに血や肉や骨のもとになる（赤）	おもに体の調子を整える（緑）	おもに熱や力のもとになる（黄）	エネルギー kcal	たんぱく質 g
11	火	ごはん	牛乳、手巻きいかスティック 手巻きサラダの具　手巻きのり じゃがいものみそ汁	牛乳、いかスティック、海藻ミックス、かに風味かまぼこ、手巻きのり、ぶた肉、麩干し、かつお、みそ	キャベツ、とうもろこし、にんじん、ねぎ、もやし	白飯、油、マヨネーズ、じゃがいも	568	27
12	水	発芽玄米ごはん	牛乳、カレー グリルハンバーグ アスパラの和風サラダ	牛乳、ぶた肉、Fiハンバーグ、鶏レバーペースト、かつお	たまねぎ、にんじん、にんにく、キャベツ、アスパラガス	発芽玄米ごはん、じゃがいも、さとう、油	704	25.7
13	木	ごはん	牛乳、白身魚のフリッター 小松菜のツナ和え ふだまけ	牛乳、ツナ、とり肉、かまぼこ、とうふ、かつお、白身魚フリッター	さきつま、もやし、にんじん、ねぎ、えのきたけ	白飯、油、ごま、さとう、玉ふ	594	26
14	金	赤飯	牛乳、さわらの照り焼き、 春キャベツのおひたし わかたけ汁　お祝いタルト	牛乳、さわら、油揚げ、わかめ、とうふ、かまぼこ、かつお	キャベツ、たけのこ、にんじん、ねぎ	赤飯、油、でんぷん、さとう、もものタルト	891	31.3
17	月	ひじきごはん	牛乳、あじの塩焼き たまごどうふ 変わりづけ	牛乳、とり肉、ひじき、油揚げ、ちくわ、あじ、たまごどうふ	こんにゃく、にんじん、きゅうり、たくあん	アルファー化米、さとう、油、ごま	513	29.2
18	火	小型ロール	牛乳、野菜たっぷりやきそば ささみの中華あえ ごまだんご	牛乳、ぶた肉、ちくわ、とり肉	にんじん、キャベツ、たまねぎ、しいたけ、もやし、きゅうり	小型ロールパン、ごまだんご、油、やきそば、さとう、ごま油	620	23.3
19	水	ごはん	牛乳、生揚げのみそかけ 小松菜とキャベツの和えもの わかめ汁	牛乳、生揚げ、ぶた肉、赤みそ、かつお、わかめ、とうふ、かまぼこ	しょうが、さきつま、キャベツ、にんじん、ねぎ	白飯、でんぷん、さとう	573	25.9
20	木	ミルクロール	牛乳、メンチカツ ミネストローネ コーンサラダ	牛乳、ベーコン、大豆、キャベツ入りメンチカツ	キャベツ、にんじん、たまねぎ、マッシュルーム、セロリー、トマト、きゅうり、とうもろこし、レモン	ミルクロールパン、油、ごま、さとう	663	25.5
21	金	ごはん	牛乳、えびしゅうまい ホイコーロ ナムル	牛乳、えびしゅうまい、ぶた肉、赤みそ、ハム	たまねぎ、にんじん、ピーマン、キャベツ、たけのこ、にんにく、きゅうり、もやし	白飯、油、でんぷん、ごま油、さとう	565	24
24	月	ごはん	牛乳、五目厚焼玉子 たけのこのうま煮 野菜のおかか和え	牛乳、五目厚焼玉子、とり肉、昆布、かつお	にんじん、たけのこ、こんにゃく、ごぼう、いんげん、しいたけ、キャベツ、だいこん	白飯、油、さとう	553	24.6
25	火	クロワッサン	牛乳、鶏肉のトマトソースがけ 春野菜のポタージュ 枝豆サラダ オレンジ	牛乳、とり肉、ベーコン、ツナ	たまねぎ、マッシュルーム、アスパラガス、キャベツ、にんじん、えだまめ、トマト、とうもろこし、オレンジ	クロワッサン、さとう、油	633	30.1
26	水	ごはん	牛乳、ホキの揚げ煮 かき玉汁 キャベツの梅あえ	牛乳、たまご、かまぼこ、とうふ、もずく、かつお、米粉のホキフライ	ねぎ、にんじん、えのきたけ、キャベツ、きゅうり、ねり梅、赤しそ	白飯、油、でんぷん、さとう	602	26.8
27	木	ソフトめん	牛乳、焼きぎょうざ ちゃんぽんあんかけ 茎わかめのサラダ	牛乳、焼きぎょうざ、ぶた肉、ちくわ、茎わかめ	キャベツ、もやし、たまねぎ、にんじん、ねぎ、しょうが、とうもろこし、きゅうり	ソフトかんすい式めん、でんぷん、ごま油、さとう、ごま	599	26.9
28	金	ごはん	牛乳、ハートかぼちゃコロッケ 沢煮わん 昆布あえ	牛乳、とり肉、かつお、こんぶ	パンプキンハートコロッケ、にんじん、油いごぼう、しいたけ、えのきたけ、たけのこ、ねぎ、キャベツ、もやし、しらたき	白飯、油	556	23.8

2-4-71　2018年４月の献立表

食器の変遷　各学校で調理していた一九七一年以前は、銀色のアルマイトの食器だった（2―4―72）。学校給食センターが稼働した一九七二年以降は、ポリプロピレン製の食器が使われた（2―4―73）。その後、一九八〇年にメラミン製の食器が使われ始めたが（2―4―74）、ポリプロピレンもメラミンも体に害を及ぼす可能性があるとして、強化樹脂が使われるようになった。しかし、強化樹脂も割れてけがをする心配があり、割れない樹脂食器へと変更した（2―4―75）。

2-4-72　1971年以前の食器

2-4-73　ポリプロピレン製の食器

2-4-75　2019年現在の食器

2-4-74　メラミン製の食器

次世代育成事業

町では、次世代育成のために様々な町独自の取組みをしている。

社本育英事業　一九八二年、初代町長を務めた社本鋭郎（しゃもとえつろう）が逝去し、一九八五年に遺族から町の教育に役立てて欲しいと一〇〇〇万円の寄附を受けた。町では、利子運用型の社本育英事業基金を設置した。この基金は、毎年、中学校を卒業するクラス数相当の生徒に一人あたり一〇万円を奨学金として贈る制度としてスタートした。その後、金利変動により奨学金を減額したり、新たな寄附金による基金の積み増しや原資の確保によってその増額を図ったりするなどして制度を継続した。

二〇一五年、高校への進学にあたり、就学が家計的に厳しい町民への支援策として年五万円を三年間にわたり助成する制度もあわせて開始した。

さらに二〇二〇年からは、従来の奨学金制度は中学校在学時の「奨励」と位置づけ、就学支援対象者が高校などへ進学する場合、一時金に充てることができる奨学制度として見直しをおこなった。これは、国・県の高校などを対象とした授業料及び入学金の無償化政策が充実してきたことから、入学準備の一時金が確保できればより進学が可能となると判断したためである。

奨学金返済者助成制度　バブル経済崩壊後、国全体の経済成長スピードが落ち、特に労働者の所得の伸びは、先進国といわれる諸国に比べ著しく低くなった。そして主に大学進学の時に奨学金を受ける学生が増え、大学を卒業したと同時に多額の返済残高を負う状況であった。

そこで二〇一六年、施策見直しから生み出した財源を活用して、奨学金の返済をおこなう学生を対象に、年一万円・三年間助成する制度を始めた。町には毎年、就労により町内へ転入する町民も多いことから、助成額は僅かであるが、企業支援・納税への感謝の意も込められている。

高校生等通学費助成制度　二〇二〇年、町民より、長年お世話になった町へ、借地として企業へ提供している土地を寄附したいとの申し出があった。寄附を受けた時点で毎年二五〇万円程の借地料が見込めることから、町では子ども未来基金を設置しその活用方法を検討した。

義務教育を担う町教育委員会ではかねてより、高校生以上を対象とした支援を模索しており、奨学金返済への助成制度をはじめ、高校進学時の助成制度も検討していたことから、この基金を活用し、高校生世代が通学に要する費用助成について検討をおこなった。二〇二〇年、通学者の状況と財源を勘案し、通学費用が年六万円を超える学生について、助成額三万円を限度とした制度を開始した。

人財発掘、人財育成　まちに住み働く人々が、分野を問わずより高みを目指し、全国・世界へと羽ばたく意欲を持つ町民を支援する制度を二〇二一年度から始めた。

この制度は、対象となる町民に年一万円、調査・研究をしてみようとするグループへ五万円を助成する。また、対象者の想いや活動を広報などで取り上げ、町民一体となって一緒に応援するという願いを込めている。